

永劫の果てまで見ゆる秋思かな

秋冷の羅漢にまなこなし哀し

秋風に噴水赤く青く散る

扇風機闇に向かひて舞ひ了はる

立冬の空ゆるゆると機がのぼる

廊下寒し一点の朱手術中

ゆく秋やガラスに残る指の文字

帰省みな頬骨高き島の顔

冷や冷やと礎石膝下に天守立つ

甲冑着て城門に立つ冬鳥

甲冑着て海より来たる冬鳥

落人の長も眠れる冬銀河

沈々と眠れる山に冬銀河

薄野に狂女の唄ふ子守歌

峠より雲流れくる時雨かな

筑紫野に雪積む気配宴の果て

頂の鉄塔光り時雨やむ

猿岩の咆哮飛沫く冬の濤

凧の潮うちかけて曾良の墓

老農の尿長きや冬日落つ

冬濤の登りのぼりて巖立つ

創世の日が透きのぼる初御空

初御空引く煌々と一機あり

初明かり湖燦々と光り合ふ

初明かり路標が示す羊齒の道

千の魂を埋めて雪の深さかな

化野の雪に雨降る西日中

進化図に己を重ね見る寒さ

恐竜展真白く寒き余白あり

手袋に息吹きかけて少女待つ

万華鏡ハッシと華を彩りぬ

靄はらひ筑紫野明けぬ凍光に

凍光裡山から下りし獣哮る

久方に雪の重さを傘に受く

テロといふ凍れる仕業知らざりき

リストラに凍えて男ボロちぎる

仕事なき家なき男月の下

傲慢の果てか世の風凍てしまま

風邪の子を抱きて母の並びゐる

流行り風邪絶え絶えに泣く子の軽し

彼岸花遠巻きに見る癖となり

ファインダーの縁よりこぼる秋桜